

東さんとオリ主ちゃんが一緒に暮らす話

エンゼ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自分の思いをきちんとそのまま相手に伝えることは難しい。

目
次

束さんとオリ主ちゃんが一緒に暮らす話

東さんとオリ、主ちゃんが一緒に暮らす話

窓のカーテンの隙間から入つてくる朝の日差しが心地よく、まだ眠つていてないと強く感じる今日この頃…でも、ここで起きないと次に起きるのはきっと昼過ぎになつてしまふだろうとも感じ、起きようと決意する。

そして私は手元にあるスイッチを押す。すると、今私が寝ているベッドの上半身部分がゆっくりと起き上がつていった。

「ふああ…」

眠気が収まらず欠伸が出てしまう。まずは顔を洗おうか、いやそれともご飯から食べようか。

でもその前に…

「――おはよーつーちゃん！　つーちゃんが起きたと思つて飛んできたよー！」

…早いなあ。今日こそ一人で、つて思つたんだけど…。

「おはよ東ちゃん、さつき起きたばつかなのに凄いタイミングで來たね」

「ふつふつふー…つーちゃんのことは何でもお見通しなのですよ！」

腕を組んでちょっと得意気な表情をしてるのは私の同い年で古くからの友人の一人の『篠ノ之東』ちゃん。色々な深い訳あつて私は東ちゃんの住んでいるところに住まわせてもらつてる。

本当は迷惑になりたくないから出ていきたいんだけど…せめて、自由に動くことが出来ればいいんだけど…。

「じゃあつーちゃん、今から抱えるね」

「…うん、じゃあお願ひ」

ニコニコしている東ちゃんからの提案を蹴るのはなんかちよつと罪悪感が沸くから了承をする。東ちゃんは私が返事したあとにかなり優しく丁寧に私を抱えて――近くにある、車椅子に私を乗せた。

「さてつーちゃん、リビングに行こうか！　ご飯、もう出来てるんだよ！」

「いつもありがとね。東ちゃん」

「どういたしまして！　……でも、つーちゃんをそんな風にしてしまったのは、私だから」

「……」

「だから、私が責任を負つてつーちゃんのお世話をするの。それが

……私の、東さんの義務だからね」

「…東ちゃん」

——東ちゃんがこんな風になつたのは結構昔のことだ。具体的には……小学4年生の頃。

当時の東ちゃんは何か……人見知り、かな？　そんな感じで知り合い以外は毛嫌いしていたんだ。その時東ちゃんの唯一の友達だったのは千冬ちゃんだけ。それ以外は嫌いというか近寄らないでオーラをブンブンと出してて孤立してたんだ。

私はその時転校生でね。席も隣だつたから最低でも話し掛けるレベルになればいいかななんて思つてたけど多分ダメだろうなあって思つてた。だけど、何故か会つていく内に東ちゃんの私に対する空気がそこまでキツキツじやなくなつたというか……むしろ友好的？みたいな感じになつてね。その頃からあの二人に私を交えたメンバーで遊ぶことが増えたんだ。主に二人に引っ張られる感じだつたけど。遊んでて感じたのはあの二人は私と同じ人間なのかなつてこと。身体能力は異常そのものだつたしね。

でも、勉強に至つては一人ともアレだつた。何でも出来ると思つてた東ちゃんは人の気持ちが分かんないとか言つて国語の小説辺りの成績が悪くて、反対に千冬ちゃんは計算の応用問題とか少し苦手っぽかつた。その部分だけはテストで勝つてて、心のどこかで、ああ、この二人も人間なんだなあつてしみじみ感じたよ。

あ、そう言えば千冬ちゃんが言つてたつけ……東ちゃんがあんなに

私になつるのは私に興味を持つたからだつて。うーん……私つてどこか人と違うことなんてあつたかな？

……あつたね。毎日私の周りで何かしらの不幸な目に合うこと……一日に一回何故か起ころ、色んな不幸が。例えば、怖い犬に追い掛けられたり、何もないところで躓いたり、飛んできた野球のボールにぶつかつたりするような優しいものから、工事現場の鉄骨が目の前に落ちてきたりする割と大きなものまで。これが原因でお父さんとお母さん離婚しちやつて、お母さんは変わっちゃつたんだよね……

——疫病神、かあ。

おつと、内容がそれちやつた。

仲良くなつてから暫くしてね。東ちゃんが私をとある場所に連れていつたの。そこは東ちゃんの研究所。見るもの触れる物が全部新しいものばかりで夢中になつて研究所を見て回つたつけ……取り乱してたからか物凄くはしゃいじやつて、東ちゃんから微笑ましそうに見られたのは恥ずかしかつたな…。

そしてね、奥の方で東ちゃんの今制作している発明品を見せてもらつたの。それはとつてもキレイで、思わず見惚れてしまつていた。曰く、新型の宇宙服のようなものらしい。東ちゃんは性能面について説明してくれてたけど……頭にはあんまり入つてこないでいた。ただ、その発明品は宇宙に関係するものだつて言つてたこと、まだ未完成だと言うことだけが耳に入つてきた。

『ねえねえ！　これつて、私でも乗れるのかな!!』

思わず、私は東ちゃんの話をぶつた切つてこう問い合わせた。実を言うと、私は昔から宇宙が大好きだつた。自由研究にブラックホールについて調べたり、宇宙についての文献を読んでしまうレベルまであつた。だつて宇宙は未知がまだたくさんあるし、ロマンがすごおくあるからね！　いつか宇宙に行つてみたいと思つて、それが出来る宇宙飛行士が私の将来の夢だつたんだ。

そんな時にこの発明品だ。憧れだつた宇宙を生で見れる。生きてる間にいけるかもしれない。宇宙飛行士にならなくてもいけるかも

しない。嬉しさ以外何者でもなかつた。

東ちゃんは一瞬びっくりしたような表情をした後にニッコニコになつて言つた。

『うん、勿論だよ！　ちーちゃんも宇宙大好きだもんね！』

『知つてたの？　って東ちゃんも宇宙好きなの？』

『勿論！　あ、少し宇宙について面白い話があるんだけど……聞く？』

『聞く!!』

そこから始まる宇宙談義。かなり盛り上がつてたなあ……懐かしい。

さらに最後に、私はこんな提案をしたんだ。

『ねえ、東ちゃんのお手伝いさせてよ！　私は東ちゃんみたいに機械とかには詳しくないから……雑用！　そうだ、雑用やらせて！　私もそれを作るのに協力したいの！』

東ちゃんは快く了承してくれた。それ以来、私は差し入れとかマツサージとか、東ちゃんのお手伝いをさせてもらつてた。掃除とかは逆に怒りそうだから埃が出たらササッと取り除いて他は出来るだけ触れないで、他には東ちゃんの精神面辺りのサポートとかをやらせてもらつた。そういうや東ちゃん、意外と甘えん坊だつたりするんだよね。千冬ちゃんはこれ知つてるのかな？

こんな風に過ごしながらお手伝いをしていたある日に――事件は起こつた。

その日は東ちゃん本人がその発明品――インフィニット・ストラトス、略して I S――に乗つてその性能、動作をきちんと自身で確認する日らしかつた。そして私はこの日チェック用紙を渡され、東ちゃんが不具合を指摘したらそこにに関する項目にチェックを入れるということを任せられた。

『……うーん、なんか左手に違和感……チェックおねがーい。そして追加記入で重きつて書いておいてー』

『はーい』

丁寧に一つ一つ確認していくからかなり時間がかかる。だけど、I

Sがまた完成に近づいていく。それが私が作つてゐるわけじゃないけど嬉しくてたまらないからこうやつて協力できた。

二時間くらい経ち、大体のチェックが終了して、東ちゃんがISの展開を解除しようとしたとき――

――突然、ISが勝手に動き出した。そう、勝手にだ。証拠に東ちゃんはめちゃくちゃ驚いた表情をしていた。

『つ、つーちゃん！ 逃げて!!』

声が聞こえはしたが、身体が動かない。動かせない。金縛りにあつたかのように……。

『止まれ!! 止まれ!! 止まつてよおお!!!!』

東ちゃんの怒号に反してISは動き続ける。その動きは激しくなつていき、その影響で研究所全体が振動を起こしす。そして近くにあつた鋼材が倒れて、私のほうへ――

5

――気がついた時は、次の日の朝だった。清潔感があるベッドで寝ていたのだ。病院、かな？

私は一応無事みたいだ。見た目だけ怪我はないっぽい。

それよりも東ちゃんは大丈夫なのかという心配が私を襲い、それを確認しようとベッドから起きようとすると――足が動かない。

『え』

というか今気づいた。お尻から下の感覚がない。手とかはいつも通りだつたので手を使い足を叩いたりしてみるが、全く痛くない。

『……え？』

力を入れても動く気配は全然ない。手で無理やり足を動かそうと

しても重くて動かない。まるで自分の足が岩になってしまったかの
ように感じた。

『……』

未だ状況が把握出来てなかつたのか、私はこの時完全に思考を停止
していた。

そんな時に、部屋の扉がノックされた。

『あ、どうぞ』

『……つーちゃん!』

今にも泣きそうな表情で私の元に来た東ちゃん。どうやら怪我は
負つてなかつたようで、私は少し安心。それでも隠してるかも知れな
いし、念のため聞いてみた。

『大丈夫だつた？ 東ちゃん』

『つーちゃん……』

私の声を聞いた東ちゃんはさらに泣きそうになり、急にその場にう
ずくまつてしまつた。

『えつ……東ちゃん?』

『つーちゃん……ごめんなさい……ごめんなさい……!!』

なんとか東ちゃんを落ち着かせ、私は話を聞いた。何があつたのか
を。

どうやら、I Sは暴走を起こしたのではあるが、何故そうなつたの
かは不明なよう。自動操縦なんてプログラムには仕込んでないらしい
いし、暴走なんて起こりうるはずなんてないはずだつたらしい。

そして私の足は、東ちゃんの後から來たお医者様曰く、衝撃によつ
て神経が完全に途切れてしまつてもう動く見込みはないのだとか。
それを聞いて、私はふと思つてしまつたのだ。

——ああ、また私の不幸が働いたのか。

つてね。数週間はあんまり大きな不幸はやつて来てなかつたから
無くなりかけてるのかななんて思つてたのに……この始末。今まで蓄
えられてた不幸エネルギーが一気に爆発したような感覚だ。

つまり、これは誰も悪くない……いや、強いて言うなら私が悪いのか。
私が東ちゃんのお手伝いがしたいなんて言つてしまつたから。私が

……私が悪いんだ。だからバチがあたつたんだね……私が協力しなければ、何事もなく東ちゃんはISを完成させられたのに。

『……めんね、東ちゃん』

『な、なんで謝るの?! つーちゃんは何にも悪くないのに!!』

『だつて、私がいたせいで東ちゃんのIS開発がストップしちゃつたんだもん……私の不幸のせいで』

『つ!!』

東ちゃんの呼吸が荒くなり嗚咽までし始めてしまった。

咄嗟に私は東ちゃんを抱きしめ、その力を強める。

『ごめんなさい……！ ごめんなさい……！』

謝らないで東ちゃん：私の、私のせいなんだから。

そして、何故か東ちゃんが私の世話をするつて言い始めて今に至るつて感じかな。これでもかなり断つたんだけど、押すに押されて断れなかつた。

そして、足の件をどうするのかの会議がはじまつたんだ。

最初、東ちゃんが義足を作るつて言つてたんだけど私はこれを断つた。理由は単純で、義足は定期的にメンテナンスしなきやならないらしかつたから。結局東ちゃんの負担になるからダメだなつて思つて断つたの。それに、神経が切れてるとはいっても足を切断するのはなんだかなあつて思つたからもある。これは我が儘だけどね。

次に提案されたのはISを用いること。私専用にすれば、普通に出歩くことが出来るようになるかもしれないというものだつた。でも、これにも欠点があつた。ISを動かすことに必要なものに、四肢が完全に動かせるというものがあつたのだ。試作型だつたからこそその欠点なのかもしけなかつたけど、それもあつてこの案もダメになつた。それじやあと言うことで、東ちゃんは次に車椅子を作つた。私にぴつたり合う、私だけの車椅子を。

これがまためちゃくちゃ高性能で、段差とかに来ても私があんまり

揺れないようになってる素晴らしいものだつた。

私としてはこの車椅子だけでも十分過ぎるくらい尽くして貰つてから、もう大丈夫だよと何回も言つた。束ちゃんには夢がある。それをストップしてまで私の面倒を見る必要なんてないし、束ちゃんには夢を叶えてもらいたかったから。

でも、この度に束ちゃんは、

『ダメだよつーちゃん。これは義務なんだ。私がつーちゃんを傷つけちやつた罰なの。それに、私がしたくてやつてることでもあるからさ』

なんて言うの。しかも笑顔で。

……私にはその笑顔が苦しかつた。束ちゃんはもつと我が儘になつてもいいはずなんだ。夢を貪欲に追つてもいいんだ。それが出来る力を持つてるんだから。

それを邪魔してるのは紛れもなく私。その事実が私を苦しめる。

それに――私は不幸を呼ぶ疫病神。束ちゃんのところにいても負担になるだけだ。

一回だけ、私は束ちゃんの前からいなくなろうとした。足りない脳みそフル回転させて。束ちゃんの負担にならないために。

でも、逃げられなかつた。すぐに見つかつちやつたんだ。その時の束ちゃんの表情……とても悲しそうだつた。それで無事でよかつたなんてことも言われちやつて……。

だから今は変な感じなの。大切にされてることは自覚してる。でも束ちゃんには夢を追つてほしい。私に囚われないでほしい。でも言えない。行動に移せない。もうあんな表情は見たくないから。

そんな悩みを抱えながら、今日も朝を迎える。

「……ねえ、今日の朝ごはんは何?」

「ご飯と味噌汁…あ、あと目玉焼きもあるよ! 勿論つーちゃんの大好きな半熟!」

「本当に…ありがとね、束ちゃん」

「大丈夫だつて! さ、行くよ!」

私、篠ノ之東がつーちゃん——『佐藤椿』ちゃんは会つて最初の頃の印象は幸が薄そうなだけの凡人、だつた。極々普通の並みの人間だつて思つてた。何故か気になつて彼女を観察するまでは。

気になつた過程は覚えてない。凡人認定していたはずだつたのに何故か気になつてたつてのは分かる。この感情がなんかよく分かんなくて、多分それで観察を始めたんだと思う。

観察を続けていくうちに、あの娘が普通でないことがかり発覚していつた。それはあの娘の言う『不幸』にあつた。というか正確には『不幸』ではなく、『一日一回のあの娘自身への不幸とそれとおおよそ同等の幸運を他人へ与える』というものだった。

例えば、あの娘が犬に追い掛けられたり、何もないところで躓いたり、飛んできた野球のボールにぶつかつたりしたりしたとき、あの娘の近くのどこかで他の人がお金を拾つたり、無くしてたものを見つけてたり、ガチャガチャで欲しいものを当てるたりしてた。これはまだ

序の口で、更に酷い不幸……一番酷かつたのは、あの娘の目の前に鉄骨が落ちてきたことなんだけどそれが起こった日には、成功確率の低かつた手術が近くの大きな病院で成功したらしい。こんなのが一日一回は必ず起きてるのだ。偶然と関連付けるのは少々難しかつた。

そんな観察をしていてわき出てくるのはあの娘への更なる興味。なんでそんな体質を持つてるのか、どういう仕組みなのか知りたいと思つた。その時は未だ、あの娘に対する謎の感情の正体は分からなかつたけど。

ある日、私は私の当初の唯一の親友のちーちゃんに謎の感情について聞いてみた。もしかしたら、これは私が天才だからこそ見落としていた感覺なんじやないかなつて。事実私は凡人の持つ感情についてあんまりよく分かつてなかつた部分があつたんだよね。家で映画とか見てたりしても、よくわかんないどこでお父さんやお母さんが泣いてたりしてるので、つまり、天才じやなくて凡人だからこそ感じる感情もあるんじやないかつてこと。だから身体能力は天才ではあるけど感性は凡人側に寄つてるちーちゃんに聞いてみたんだ。

『ふむ、あいつはなんとなくだが……放つておけない何かを感じるな。一夏とはまた別の……保護欲、か？』

あーなるほどね。確かになんか危なつかしいもんね。

……ん、保護欲？ 保護欲か……ちーちゃんはいつくんとはまだ違うつて感じだつて言つたよね。つてことは私が妹の箒ちゃんに感じてることとはまた別のことつてことかな……うん、確かに違う。箒ちゃんは、姉として？ みたいな感じで守りたい、みたいなのだ。合つてるかは分かんないけどね。そしてあの娘は……ずっと側に置いておきたい、支えてあげたい……あれ、ますます分かんない。不幸に対する同情から來てるの？ いやいや東さんが同情なんてしないよ。なら……なんだろ？

とりあえず私はなんかモヤモヤしながら、あの娘の観察を続けていくのだった。

観察をする過程において、私はあの娘の側にいれば観察がしやすく

なると思い、私にしては珍しく私からあの娘に話し掛けることにした。今思うとだけど、ここまで私が一つの人に執着しているのなんてなかつたかもしれない。ちーちゃんは一応例外だけど。

形からということで、ちーちゃんみたくあだ名をつけてみた。椿だからつーちゃん。まんまだね。

んで、話してみて分かったことは、何故か他の人と違つて話してて楽しさが出てきてたこと。そして、あのモヤモヤが更に強くなつたことだ。

なんとかしてそれが知りたくて、電話番号（私は携帯でつーちゃんは当時携帯を持つてなかつたから家の番号）を交換して遊びに誘つてみたりしてみた。自分でもあり得ないことをしてるとと思う。けど、どうしてものはつきりさせたかつたんだ。

時にはちーちゃんを巻き込んだりした。その時に筹ちゃんやいくんもいて、皆と仲良くなつてたつけ。その時、何故か私の胸がチクリ痛んだんだ。その時は何でか分かんなかったけどね。

つーちゃんは宇宙に興味を持つてる。この私が自分からつーちゃんとよく話す人に聞いたから間違いない。

らしくないことしてるなあつては自覚してた。でも、本人から聞くのはなんか恥ずかしいし、つーちゃんの好きなことは私も好きになりたいというか……なんだろ、またモヤモヤしてる。本当に分からぬ……けど、嫌じやない。寧ろ……いや、よそう。それより宇宙だ。

正直に言うと、私は宇宙が大好きだ。起源、何で出来てるのか、何故出来たのか、その全てが解明されてないロマンの塊。それは私の研究欲を刺激させた。ちなみに、地球のことは粗方理解しちゃつたからね。東さん天才だし。

でも宇宙についてはそう上手くいかない。だから私は宇宙を目指した。そこで、つーちゃんのことを知る前から私は密かに宇宙へ行くためのある発明品を開発し続けていた。

その名は——インフィニット・ストラトス。センスあるでしょ？ 束さんの人生で一番発明品の名前で気に入つるものなんだよ

ね。

んで、これがつーちゃんはどう関係してるかって言うとね……。

——これ、つーちゃんに見せたらどんな反応してくれるんだろ。

こんな興味が湧いた。驚くかな？ 褒めてくれるかな？ 束さんのこと凄いって思ってくれるかな？ みたいな感情が溢れて止まらなくなつた。

そんな思考をしながらも自分はおかしくなつたなという感覚が強まつたのも覚えてる。本当にここまで一人のことに執着したことはなかつたしね。

そんな訳で、私はちーちゃんでも入れたことがない研究所につーちゃんを案内した。

そしたらつーちゃんね、物凄くはしゃいでてたんだ。楽しそうにニコニコ笑つて私の作った発明品を眺めてる。すつごく可愛かつたなあ……。

んで、インフィニット・ストラatos——通称ISがある部屋に来て、実際につーちゃんに見て貰つた。つーちゃんには前情報はなし。だからこそ反応を見たかった。

そして見せた瞬間——つーちゃんの動きが止まつた。そのまま目線をISから動かさずじつと見つめてるだけ。それを見た時、物凄く不安になつちやつてき。失敗したかなつて。だから咄嗟にISの機能について説明し始めた。それでつーちゃんの気が引きたかつたから。認めてもらいたかつたから。そしたらね——

『ねえねえ！ これって、私でも乗れるのかな!?』

その日一番の笑顔でそう言つたんだ。

思わず拍子抜けしちゃつたよ。それと同時に安心もした。よかつた。認めてもらえた。喜んで貰つた。笑顔可愛い。色んな感情が私を支配する。

すぐに私は正気に戻つてつーちゃんの質問に答えた。そこからは宇宙について色々話をしたつけ。かなり専門的な部分まで突つ込ん

でいたんだけど、つーちゃんは普通についてこれてた。寧ろ、私の思
い付かなかつた観点からの宇宙の話があつたりしてすごおく面白
かつたんだ！

ますます私の中のつーちゃんが大きくなつていくのを感じる。そ
れが嬉しくあつたし、同時に苦しくもあつた……あれ、なんで嬉しく
なつたり苦しくなつたりしてるんだろう？

そんなことを考えていると、つーちゃんからこんな提案をされた。
『ねえ、東ちゃんのお手伝いさせてよ！　私は東ちゃんみたいに機械
とかには詳しくないから……雑用！　そうだ、雑用やらせて！　私も
それを作るのに協力したいの！』

私はすぐ了承した。正直、人手不足つてわけじゃあなかったし、1
人でもやつていけただけど、この時の私はすぐに受け入れた。つー
ちゃんの側にいたかつたから。自分の感情に答えを出したかつたか
ら。

そこからつーちゃんはご飯の差し入れとか、ちょっとした掃除とか
をやつてくれた。ご飯に関しては割と助かってた。研究所に籠る時
は栄養補給の意味合いで特製ドリンクだけしか飲んでてなかつたか
らかな？　かなり美味しく感じたの。それともつーちゃんの手作り
だつたからかな？　あ、きっとこれだろうね。

他には……つーちゃんに甘えてみたりしたことかなあ。東さんは
天才だけど人間。だから不調な時もある。そんなある日、作業が全然
進まなくてイライラしてたんだ。その時、つーちゃんがそつと私を抱
き締めてくれた。しかもちよつと頬を赤らめて。

一瞬で頭真っ白になつちゃつて、東さんらしくなくなんで抱き締め
たか聞いたの。そしたら、

『えつとね、イライラしてるときはハグするのがいいんだつて。私
じやダメかもしれないけど……ゴメン私今物凄く恥ずかしいや……』
イライラなんて刹那で吹き飛んだ。

え、何この可愛い生き物。つーちゃん可愛すぎない？　これ填まり
そう……イライラにはハグがいいんだよね？　なら逆に言えば束さ

んがハグしないと束さんのイライラは収まんないってことだよね？
もうイライラなんてしてないけどイライラしてるつてことにしよう。

つてことでギュー…………あーやばいつーちゃんの身体気持ちいい。ハグなんてちーちゃんか箒ちゃんくらいしかやつてなかつたけど、つーちゃんはちーちゃん達とは別のベクトル。ふんわりとした柔らかさ、妙な儂さがある。そして赤面つーちゃん可愛い。この感覚……なんなんだろ？ そう思つたのも束の間、私はつーちゃんにこんな質問をしていた。

——ねえつーちゃん。私ね、最近気付いたらある人のこと考えてるんだよね。しかもモヤモヤするの。これつて何なのかなあ。
つーちゃんはんー……と首をかしげながら考え始めた。その動作でさえ可愛い。

そして、つーちゃんは答えた。

『束ちゃん、それって恋じゃない？』

——恋？

『うん、恋。図書館で見たマンガとかの知識だけどね？ それつてさ、その人のこと好きつてことじやないのかなあ』

——恋、かあ。

私は脳内でも同じ言葉を反復させる。その結果、私は一つの結論にたどり着いた。

——束さんは、私はつーちゃんのこと大好きなんだ。

今までつつかえてたものが一気に消化された気分。モヤモヤしてたものが鮮明になつた感覚だ。

つーちゃんが好き。そう自覚した瞬間から、つーちゃんの全てが愛らしくなつた。

顔、身体、性格、声、果てには不幸現象さえも、全てが……あれ、そ
ういや最近つーちゃん不幸現象に合つてないような……？ 良いこ
とだよね……？ まあいいや。

……この時の私は浮かれてて、そのことがどれだけ重大なことであるかをはつきり自覚していなかつた。それと同時に『幸運も働いてなかつた』ことも理解しておくべきことだつたんだ……今となつては、全部遅いけど。

始まりはある日のこと。この日はつーちゃんに依頼してレポートに色々と纏めて貰うことにしていた。つていつても内容は私がISを直接纏つて、不具合を見付けて、それを言つたことをメモして貰うだけなんだけどね。

つーちゃんは雑用ばっかりしてたけど本当はISに関わりたいだろうから一晩考えてこの方法を捻り出した。つーちゃんにまだ未完成なISを纏わせるわけにもいかないしね。隕石対策の絶対防御も理論では完成してるけどまだ不完全だし、つーちゃんには怪我をしてほしくないからね。

粗方動作の確認も終了して、ちよつと精神的にも疲れたからまたつーちゃんに甘えようかなー、なんて考えてたときに――

悲劇は起こつた。

不幸にもISが急に動き出したのだ。理論上じやあり得なかつた暴走。それが今起こり始めた。

私はつーちゃんに避難するよう呼び掛けた。でも、つーちゃんは混乱してゐるのか動かない。

つーちゃんに怪我をさせないように操縦をしながら暴走を食い止めようとするがなかなか止まらない。

不味い、不味い、不味い!!!!

研究所にも被害がいつてるけども研究所が傷付くことよりもつーちゃんが傷付くことが怖い。早く止まつて……早く、早く!!
ようやく暴走が収まつて来た頃……私は見てしまつた。

——つーちゃんが鋼材の下敷きになる瞬間を。

必死に制御可能になつたISを用いてすぐに鋼材をどかしてつーちゃんを救出した。呼吸はなんとかしていたけど、足が医学方面にはまだ力を入れてなかつた私でもひどい状態になつてるのがすぐに確認出来た。

その日の内に大きめの病院に連れていつて、診てもらえるようお願いした。この時の私は泣いてたと思う。

病院の方も緊急事態と思つたのか、なにも聞かずにすぐにつーちゃんは医者達に連れていかれた。

『……神様、どうかつーちゃんを……!!』

ずっと私はつーちゃんの治療が行われてる部屋の前で泣きながら生まれて初めて神様にお願いをした。

……私のせいだ。私がつーちゃんのことを巻き込んだからこうなつたんだ。私が巻き込みさえしなければ……!!

『——よくも』

『ツ!? うわああああああ!?』

その途中で、つーちゃんの幻覚を見たりした。私を責めるつーちゃんの幻覚。

見たときは思わずその場にうずくまつてしまつた。

『——よくも私を怪我させたな……!!』

『——お前のせいだ……!!』

『——絶対に許さない……!!』

『ヒグッ……ご、ごめんなさい……! ゴメ、ゴメんなさい……!!』

複数のつーちゃんが寄つてかかつて私を責め続ける。それに対して私はうずくまつたまま謝り続けるだけ。それしか出来なかつたら。

これはつーちゃんの治療が終わる時まで続いた。

治療室からつーちゃんと病院の人たちが出てきた。私はハツと顔を上げて病院の人を見た。

『——幸運にも命に別状はないよ……最善は尽くした。でも一晩安静にさせておいたほうがいいと判断した。会うならまた明日来てほしい。そしてだが、この子の名前とこの子の家の電話番号を教えてくれないか?』

私は言われた通りに告げ、その日はフラフラしながらもなんとか自宅へ帰り、部屋のベッドで布団にくるまつてずっと震えていた。

次の日、結局一睡もしてない私は内心ビクビクしながらもつーちゃんのいる病院へと向かつた。

許してもらえるなんて思つてない。だけど、謝らないといけない。起きてないかもしけないけど、それなら起きるまで通い続けよう。その思いを胸に私は勇気を持つてつーちゃんの病室へノックをした。

『あ、どうぞ』

『つー!』

よかつた。生きてた。という安心感が身を包み、いてもたつてもいられなくなつて勢いそのままに病室へと入つていく。

『つーちゃん!』

なんか呆けた顔をしたつーちゃんがそこにはいた。そこからは怒りや憎しみのような感情は感じられない。でもここから沸いてこないとは限らない。

実際につーちゃんを目の前にして、生きててくれたという嬉しさと、責められるだろうという恐怖が同時にやつてきて少し私は震え、つーちゃんから告げられる次の言葉を待つた。

『大丈夫だった? 束ちゃん』

しかし、やつてきたのは私を心配するつーちゃんの声だった。

この娘は、私のせいで自分が傷ついても私の心配をしてくれるのか。

……こんなにも優しい娘を、私は傷つけてしまつたんだ。私の事情

のせいで。

『つーちゃん……』

罪の意識が止まらなくなり、私はその場でうずくまつてしまつた。

『えつ……束ちゃん?』

『つーちゃん……ごめんなさい……ごめんなさい……!!』

『た、束ちゃん落ち着いてえ!!』

つーちゃんに言われ一先ず自分を落ち着かせ、何があつたのかを話した。

その後につーちゃんに身体の調子を尋ねてみると、脚の感覚が感じられないと言つていた。

嫌な予感がして、ナースコールで看護師を呼び、そこから医者を呼んでもらつた。

医者は来てから『本当はご家族が来てから話すつもりだつた』と言つて、つーちゃんの今の状態について説明した。

曰く、神経が死んでしまつており、脚はもう完全に動く見込みはないとのこと。

一体何があつてこうなつたのかを私に尋ねてきたが、私が言いづらくて沈黙を貫いていると、この子のご家族にはキチンと説明するんだよと言われ、その話題を終わらせてくれた。

『そつか……』

全部の話が終わつたとき、ふとつーちゃんは呟いた。

そして私の方を申し訳なさそうに振り向き、こう言つたのだ。

『……ごめんね、つーちゃん』

『な、なんで謝るの!? つーちゃん何にも悪くないのに!!』

訳が分からなかつた。責められることを予想してたのに謝られるだなんて……。

『だつて、私のせいで束ちゃんのＩＳ開発がストップしちやつたんだもん……私の不幸のせいで』

『つ!!』

ああ、そうか。そうだ。この娘の不幸現象が最近起こつてないこと

に気づいていたはずなのに。

もつと事を重く見るべきだつた。警戒は出来たはずなんだ。

私がもつと……しつかりしてれば!!

急に、つーちゃんから抱きしめられてる感覚を覚えた。けども味わつてゐる余裕なんてなくて、ずっとつーちゃんに対して謝り続けた。

『ごめんなさい…！　ごめんなさい…！』

つーちゃんから抱き締められてなんとか落ち着きを取り戻してきた頃、急に医者から呼び出され泣き顔を拭きそこへ向かつた。何かあつたのか？　そう思つていると、

『実はね。教えてもらつた電話番号を使って佐藤椿さんの家に電話をしたんだよ。でも誰も出る気配が無くてね。本当に正しいのかもう一度聞きたくて』

あんな状況だ。私が嘘を伝えるわけがない。

証拠として携帯に登録されてるつーちゃんの家の番号を確認しても、やつぱり正しかつた。

『ふむそろか。すまないね、疑つてしまつて』

……そういえばつーちゃんの家のことは知らないなど私は思つた。どんな生活をしてるのか等私は全然知らなかつたのだ。今思えば、つーちゃんが自然にその話題を避けさせてたつてのもあるかもれない。

今まで調べるのに罪悪感みたいなものが沸いていたけど今は事情が事情ではあるし、無理矢理にでもつーちゃんの親に会つて話して謝らないといけない。

そう感じた私はつーちゃんの家に來た。住所は知つてはいたけど実際に來たのは初めて。そして件の家はボロボロの一軒家。まるで誰も住んでないかのような不気味さがあつた。

本当にこれがつーちゃんの家なのかと疑いつつも私はチャイムをならす。誰も出てくる気配がない。

なんか違和感を感じたため軽くドアノブを捻つてみると、ガチャと開いた。鍵は閉まつてないようだつた。

申し訳無いなと思いつつも私は侵入し、驚いた。

まず思ったのは、広すぎること。

家具等必要最低限しかおかれでなく、広いスペースが割とあちこちにあつた。空き家と言われたら納得しちゃうレベルまで。

これならまだ、私の実家……いや、研究所のほうがまだ快適に過ごせるはず。そんな空間だった。

部屋も色々見てみるが、ほぼ空き部屋。綺麗に取り除かれたみたいに何も残つて無かつたのだ。二部屋を除いて。

その内の一 部屋はつーちゃんの部屋らしいものだつた。ここも置いてるのはボロボロの机と椅子と布団。あとは二着程度の私服だつた。そういえばつーちゃん、服のバリエーション少なかつたような……。

そしてもう一部屋が…恐らく、つーちゃんの親の部屋。お母さんだと思う。ここも生活感なんてなくて埃まみれだつた。他と違うのは、日記のようなものがおいてあつたことか。

嫌な予感をビシビシと感じながらも、私は日記を読み始めた。

最初に書かれてあつたのは新婚について、子供を授かつたことについてだ。文を見るに、幸せだつたんだろうと思う。

次に書かれているのは子供の名前を『椿』としたこと。そしてかわいくてたまらないということとも書いてあつた。十中八九つーちゃんだろうね。そこには同意するよ、うん。

暫く幸せだ。みたいな文章が続いてた。珠に、つーちゃんが不幸体质なのかもしれないという記述があつたが、後にそこも含めて愛したいという記述もあつた。まあ、ここまでだけならいい親つてやつなんだろう。

急に字体が変わつた。どうやら夫が不倫をしたらしい。更にあろうことか原因を妻のほうにやり、離婚したようだ。否定しても皆は夫を信じて誰も妻のことを信じないとある。

親権はメンツのためになんとか取つたらしいが、その時からこの妻はつーちゃんを疫病神と呼び始めやがつた。

曰く、私とあの人を別れさせた疫病神、だとか。

「ここで私は強い殺意を覚えたが堪えて読み続けた。

正直育てたくないという記載もあった。もう引っ越しの準備をつーちゃんに内緒で進めてるとか。

でも死なれたら面倒だからある程度お金を置いては行くともあつた。

それを見た瞬間堪えきれなくなり私は日記を本能のままにビリビリと本気で破いた。

『ふつつづけるなっ!!!』

怒りのままにそう叫んでしまう。ここまで胸糞が悪くなつたのは生まれて初めてだろう。この親に対しての殺意が限界を超えようとしていた。

それと同時に、つーちゃんにはもう帰る居場所がないということに気付く。こんな糞親に育てられて……いや、途中から育てられてすらないのか。

どうすればいい……どうすればつーちゃんを……。

そこで、私に一つ案が浮かんだ。つーちゃんがこうなつてしまつたのは私の責任なんだ。

……なら私がつーちゃんのお世話をすればいい、と。

名案だと我ながら思つた。でも実家だとなんかアレだし、研究所のほうがいい。それに、ずっとつーちゃんの側にいられるから。

早速私はつーちゃん専用の部屋を作つた。色々設備を配置してから、私はもう退院はしていることになつてるつーちゃんの迎えに行つた。

最初はかなり遠慮していたつーちゃんだけど、必死に頬み込んだら折ってくれた。押しには弱いのかもしれない。

早速連れて帰つて部屋に案内し、私とつーちゃんは一種の会議のようなものを始めた。

題は、つーちゃんの脚について。

最初は義足の案が出たんだけどこれにつーちゃんが反対した。理由は教えてくれなかつたんだけどね……断固反対だつていうだけで。可愛かつたから許しちやつた。それにつーちゃんが嫌がることは強制したくなかったしね。

次にISを用いればいいという案を出した。早速試したんだけど、まだ未完成だつたのか四肢が動かせないと動かせなかつた。これについては現在改良中。

最後に出たのは車椅子の案。病院でも車椅子を動かしてたんだけどサイズとかあつてなかつたみたいで動かしにくそだつた。

特に反対もされなかつたし、私は私の持てる全ての力を使ってつーちゃん専用の車椅子を作り上げた。ある意味ISと同じくらいな存在……それ以上かも。

つーちゃんは喜んでくれた。本当にいいの？ つて聞いてくるレベルまで。でも、これくらいしか私には出来ないからね……。

その日辺りから、つーちゃんは私にIS開発を再開するよう促した。一応はしていると言つても、それに専念してほしいと返していく。それはつまり、つーちゃんのお世話をしないでもいいって言つてゐつてことだ。

でも、これは私の義務でもだし、やりたいことでもあるのだ。だから大丈夫だと言つてもつーちゃんは苦々しい表情を止めない。つーちゃんには笑つていて欲しいんだけどな……。

ある日のことだ。つーちゃんが研究所からこつそり居なくなろうとしていたのだ。結局すぐにつーちゃんは見つけ出せたけど、最初はかなり焦つてしまつて怖くなつた。見つけたとき、安心感から私は半泣きになつていた。

『……束ちゃん』

『グスツ……無事で、よかつた……ホントに……！』

もう二度とつーちゃんを失いなくない。その思いが異常なまでに強くなつていつた。

——もう、誰にも渡さない。

不幸現象については既に対策案も立てて実行している。予備案も山ほどあつて準備も終わつてゐる。死角はない。

——世界で一番つーちゃんを知つてゐるのは私なんだ。

——つーちゃんは、私がお世話をするんだ。

「つーちゃん、美味しい？」

「うん、美味しいよ束ちゃん。あ、これ、もしかして味付け変えたりした？」

「お、良く分かつたねつーちゃん！ 少しアレンジしたんだ！」

「束ちゃんつて本当に何でも出来るよね。流石束ちゃん」

「えへへ、束さんはてえんさあいだからね！」

——こんな風につーちゃんと一緒に過ごせる日々がずっと続けばいいなあ。